

令和6年度京都市地域リハビリテーション推進会議 摘録

日 時 令和6年12月23日（月） 15時00分～16時25分

場 所 COCO・てらす 4階研修室1

出者席 委 員：上原、加藤、市田、丹生、木村、江平（麻田委員の代理）渡邊、吉村、
木下、荒木、宇川、西村、近藤、上島、遠藤、藤田（坂本委員の代理）、
西尾

事務局：後藤地域リハビリテーション推進センター地域連携推進担当部長
奥井地域連携推進担当課長、黒木相談課長、中芝高次脳機能障害支援課長、
板谷地域連携推進係長、田上相談判定係長、
小野田地域リハビリテーション推進係長、全高次脳機能障害支援係長
溝口訓練第一係長、澤村企画課担当

1 地域リハビリテーション推進事業及び相談事業の実施状況等について

（事務局からの資料の説明）

質疑応答

（議長）

6ページの障害福祉サービスの支援事業について、延べ指導職員数が減っているが、実施回数に変化が見られない中で減少しているのはなぜか。

（事務局）

訪問先の職員の状況により、延べ指導職員数は変動する。今年が特に減少傾向にあるとは考えていないが、年間の実績を見て検証したい。

（A委員）

地域リハビリテーション推進研修について、医療的ケアに関するものについてはもう一歩踏み込んだ内容にしていきたい。自立支援法が始まってから施設から地域への移行が前提となってきたところ、医療的ケアの介護者の担い手が少ないというのが現状である。生活介護の事業者の受け入れが困難で、施設入所を希望されるケースもある。施設に入らなくても地域で支えられる形の充実のために、研修においても重点を当てていきたい。

(事務局)

来年度の研修の内容については、今年度の研修結果を見ながら検討していく。

様々な障害がある方が地域の中で暮らしていくためには、地域の支援力が必要になってくる。その中で、支援する立場にある方の医療的ケアへの関心は高いと感じており、研修という形で支援者の知識の向上等に力添えができるのではないかと考えている。

(議長)

医療的ケアが必要となると、福祉施設での受け入れが困難。施設側の人員不足も課題であると思う。そうしたことも踏まえた研修の実施をお願いしたい。

(B委員)

人手不足の問題は、この業界全体の課題ではないか。

京都医師会も、答えを持っているわけではないが、できるだけ早くIT化が必要だと考える。少ない人数で、介護ができるような社会にしていかななくてはならない。

派遣会社に関しても、同じ人を取り合っているという状況になっている。このような状況に正面から取り組まないと、話は前に進まない。

(C委員)

京都府看護協会では相談するところがない学校の看護師、保育園の看護師たちのネットワークを作ることを目的に、訪問看護の方にも協力いただき、OJT研修の実施をしている。

そうした地域の小児の領域に関する活動を含めて多様な場面で看護職が活動しているため、様々な業種の方たちとつながる交流会としたい。

また、3号研修のできる看護職の研修、指導者研修を行っており、施設側の外部職員、先生、保育士が、研修を受けられる体制はできていると考える。

最近では放課後デイサービスの職員も参加している。できるだけ多方面で働いている方たちの声を拾い上げて、広く研修・交流できればと考えている。

(D委員)

医療的ケアは様々な支援が必要になるので、相談支援専門員がついて支援することが多いが、障害児の場合は相談支援専門員が入りづらい状況がある。

学校といろいろやり取りしたいが、様々な要因でスムーズにいかない状況が多い。

その結果、保護者にしわ寄せがいきってしまい、困られている方が多い。たくさんの方と連携をとりながら、責任をとれるような環境を作っていくことが大切だと思っている。

(議長)

児童に関しては施策の遅れが目立つと考えるが、今年、オーバードーズの研修があったように新しい取組みも始めているがどうか。

(事務局)

こころの健康増進センター、児童福祉センター、地域リハビリテーション推進センターの方で、複合的な課題があれば研修としてやっていきたいと考えている。来年度のテーマについては吟味をしながら検討していく。

(E 委員)

発達に困難を持つ子ども達の複合的課題について研修を予定されているが、そうした子どもたちの保護者に対して、A I チャットボットなどを用いた情報発信の強化を検討しているのか。

(事務局)

現在は、当該チャットボットは一般的な質問に対する回答をしていくものとなっているが、今後もう一步踏み込んだ形で検討していきたい。

2 高次脳機能障害者支援の実施状況について

(事務局からの資料の説明)

質疑応答

(F 委員)

京都府高次脳機能障害支援養成研修については、京都市にも多大なご協力をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げる。

今年度から、この養成研修を受けた者が支援者として従事する場合に加算されるという要件となっている。来年度もブラッシュアップして開催していきたい。

さて、当事者・家族交流会について、京都市では、どのように参加者を募集されているか。その方法についてお聞きしたい。

(事務局)

地域リハビリテーション推進センターが発行している広報誌や、ホームページ等を見ての個別参加や、高次脳機能障害に関する相談を受ける中で交流会のことを紹介するといったことが多い。

(F 委員)

リピーターの方もいるのか。

(事務局)

数年にわたって参加いただいている方もいらっしゃる。

そうした方は先輩参加者として、これまで苦勞された経験を率先してお話いただくことで、新規参加者が安心できる場の空気づくりに貢献いただいている。

(F 委員)

府としても、交流会を充実していきたいと考えおり、今後とも情報交換をしていきたい。

(E 委員)

p 13 の体制について、言語聴覚士が含まれない理由を教えてほしい。

(事務局)

高次脳機能障害者支援センターには言語聴覚士はいないが、今年の1月の組織改正により高次脳機能障害者支援センターと障害者支援施設が高次脳機能障害支援課として一体となり、障害者支援施設に属する言語聴覚士が支援センターの応援も行っている。

(E 委員)

作業療法士と重複するところもあるかと思うが、言語聴覚士の存在は、音声言語コミュニケーションの専門として視点が豊かになると考えている。引き続き、よろしくお願いする。

(副議長)

障害者権利条約では、環境と周囲の人の態度の相互作用が障害を生んでいるとしている。

高次脳機能障害は途中で障害を患うということで、本人と周囲の人の障害受容も中々難しいものがある。例えば、地域参加、職場参加で疲れやすかったり、同僚として職場の受け入れが難しかったりということもあると想像される。

その中で、それらの課題や事例をもっと会議の場で共有化できないかと考えている。

(事務局)

当センターの当事者・家族交流会において、就労系サービスに関心がなかった方が他の参加者の話を聞いて関心を高められたという事例がある。また、日ごろ外出されない方が他の参加者の体験談を参考に、日中活動を広げられるという例もあり、この会が積極的な

社会参加に向けたきっかけづくりの場として作用していると感じている。

職場復帰の事例としては、重度の麻痺が残り車いすを利用されている方が、以前とは異なる職場ではあるが、会社側の大きな理解と協力により、復職が可能となったという事例がある。また、記憶障害と注意障害が重く一旦は会社を退職された方が、当施設と職業センターの連携による支援のもと、元職場にも協力いただき、アルバイトという形で元の職場に復帰され、いきいきと就労されているという事例もある。

(副議長)

是非そういった具体的な事例を共有いただきたい。また地域住民からの交流事例はあるか

(事務局)

地域住民との交流はまだできておらず、今後の課題だと考えている。

(G 委員)

「脳障害を理解するっ！！」の中に、高次脳機能障害・発達障害・認知症が同一のグループとなっているが、それらは性質が異なるものであり、同一の研修に取り扱うことに違和感を感じている。

以前、高次脳機能障害と自閉症が同じといわれていた時期もあり、専門家も間違っ使用していたこともあった。

また、私は小児の専門で、高次脳機能障害の児童はとても少ないが、発達障害と診断されるか、高次脳機能障害と診断されるかで、保護者の心持ちが大きく異なる。

誤った認識が広まることのないよう、言葉の使い分けはしっかりとすべきと考える。

(事務局)

確かに小児の高次脳機能障害の件数は少ないが、当センターで支援させていただいている児童もいらっしゃる。その支援の難しさも実感しているところであり、今後よりよい研修にしていくよう努力していく。

(議長)

小児科医に発達障害と高次機能障害の違いをはっきりとしてもらえるように、小児科医会の方には通達したいと考えている。

(副議長)

学会では、発達障害ではなく、神経発達症という言い方になっている。Disorder を障害とは訳さず、すべて「症」という言い方にしている。それも一つの流れだと思っている。

(F 委員)

「脳障害を理解するっ！！」には認知症も入っているが、認知症と高次脳機能障害は別の疾患で経過も全く異なり、待遇も変わってくる。プログラムを実施するに当たっては、そのあたりを整理されてはどうか。

(事務局)

この研修は、それらをひとくくりにして研修を実施しているわけではなく、それらの違いを明確にお伝えして、それぞれの障害について理解を含めていただくことを趣旨としている。

(F 委員)

「よくわかる高次脳機能障害セミナー」の中で認知症の講座があるが、研修名と研修内容に異なりがあるのはどうか。

(事務局)

受講者の方から高次脳機能障害以外の認知症のことについても教えてほしいという要望を受けて開催させていただいたもの。ただ、タイトルと研修内容が異なるのはご指摘のとおりである。

(F 委員)

それも含めて整理をしていただければと思う。